

*The Cricket on the Hearth*に出てくる生きものたちと人間 — ヴィクトリア朝クリスマス物語の悲哀 —

古 我 正 和

〔抄 録〕

イギリスのヴィクトリア朝は、対外的に大いに発展して経済的にも国内の産業がフル稼働していた時期であった。そのため人間個人の幸福や安寧はそれに追い付かず、国家的な方面からの法整備もかなわぬままに、イギリス国民はその好景気に飲み込まれ、弱肉強食体制の中で、模索しながら生きていかなければならなかった。

Charles Dickensはそのような世相の中で堅実に生きていこうとする庶民に目を向け、暖かく見守った。とりわけクリスマスには人々の心を癒してくれる物語を数多く書いた。本論では、そのクリスマスの物語の一つ *The Cricket on the Hearth* をとりあげ、そこに出てくる生きものと人間が、ヴィクトリア朝というこの試練の時期にいかにか懸命に生きているかを眺めながら、同時にディケンズの描くヴィクトリア朝の影も探ってみた。

キーワード ヴィクトリア朝とディケンズ、ヴィクトリア朝の人間模様、ディケンズのレトリック

I

The Cricket on the Hearth は1845年、クリスマス本として刊行された。この作品は当時大変な人気があり、またPeerybingle夫人に見られる幼い妻のような、後に出版される作品に出てくる重要な主題の前ぶれを、すでに含んでいたと言われている⁽¹⁾。他の5つのクリスマス本と比べると、人間以外の生きものがそのタイトルとなっている作品として興味深い。そこで本論では、その生きものから始めたいと思う。

この作品では主役のMrs. Peerybingleと共に最初からこうろぎが登場する。やかんが沸騰してたてる音とこうろぎが鳴く音との競演としてである。そして作者みづからがその両者の間に入って、それを説明する。

The kettle began it! Don't tell me what Mrs. Peerybingle said. I know better.⁽²⁾

これは作品の冒頭の部分であるが、しかし本文よりも前に、すでにこうろぎは人間の主役よりも先に登場している。章のタイトルとしてである。第1章はCHURP THE FIRSTとなっている。第1章ではなく「第1声」となっているのである。これ以後の各章はすべてこのように章に代わって「声」が用いられる。この声はもちろんこうろぎのそれである。

このようにこうろぎはこの作品のタイトルだけあって、まさに千両役者となって活躍している。また直ぐ後でMrs. Peerybingleは次のようにこうろぎの意味を説明する。

'And it's sure to bring us good fortune, John! It always has done so. To have a Cricket on the Hearth, is the luckiest thing in all the world!' ⁽³⁾

台所の炉端にいつもこうろぎが居ることは世界でもっとも恵まれたことで、こうろぎはその時幸運をもたらしてくれると述べるのである。また初めて夫のJohnが自分をJohnの家へ連れて行ってくれた時に初めて聞いたのがCricketのChirpだったとか⁽⁴⁾、2人の何かのきっかけがCricketだったとか⁽⁵⁾、このあたりはCricket尽くしである。そして

'...and I love the Cricket for its sake!'⁽⁶⁾

という種類の文が多出する。こう考えると、Cricketという存在は特別の意味を持っているように思われる。

善意の人と悪役が入り乱れてうごめくどろどろしたヴィクトリア朝にあって、Cricketを大切に思うこのような心情は、次にみるようなそれとは逆の描写によってますます先鋭なものになる。

'Bah! what's home?' cried Tackleton. 'Four walls and a ceiling! (why don't you kill that Cricket? I would! I always do. I hate their noise.) There are four walls and a ceiling at my house. Come to me!'

'You kill your Crickets, eh?' said John.

'Scrunch 'em, sir,' returned the other, setting his heel heavily on the floor.'⁽⁷⁾

Tackletonとは、自分の邸宅の一部にCaleb Plummerとその盲目の娘Barthaとを住まわせて、二人に自分の店で売る人形を作らせている悪徳商人のことである。上はそのTackletonと、その全く逆で善意そのものの人間、運送屋のJohnとの会話である。「家庭とは四つの壁と一つの

天井以外に何が在ると言うのか」と前者が言う。全くお寒い家庭観。そしてその具体的な行動の一つとして、家庭の「こうろぎ」を殺すと言う。後者にとってはCricketは何かの象徴なのだ。それが前者には欠落している。だとすると、この作品の題名である「こうろぎ」は何の象徴なのだろうか。この問題の解決から、この作品の解明が始まると思われる。

そう言えば、この作品の初めにCricketとKettleとの描写があり、それらが互いに音を競い合うのがある。その時はそれだけだったが、話がすすむにつれてそれだけではなくてくる。

And the Cricket and the kettle, turning up again, acknowledged it! The bright fire, blazing up again, acknowledged it! The little Mower on the clock, in his unheeded work, acknowledged it! The Carrier, in his smoothing forehead and expanding face, acknowledged it, the readiest of all.⁽⁸⁾

ここではCricketだけではなく、kettle (やかん)、暖炉に燃える火 (fire)、時間が来ると時計の中から草刈り人が飛び出して来て草を刈る、その人形 (Mower) などが人間界に入り込み、有機的・精神的な役割さえしている。それは上の文に続いて次のように書かれていることから分かる。

And as he soberly and thoughtfully puffed at his old pipe; and as the Dutch clock ticked; and as the red fire gleamed; and as the Cricket chirped; that Genius of his Hearth and Home (for such the Cricket was) came out, in fairy shape, into the room, and summoned many forms of Home about him. Dots of all ages, ...⁽⁹⁾

これに続いてDotのあらゆる年齢や状況の姿が現れる。ここにはいみじくもはっきりとCricketがGenius of his Hearth and Homeと書かれている。「炉と家庭の守り神」なのである。そしてこれが妖精の姿となって現れ出てきて、Johnの回りにmany forms of Homeを呼び出す。

この作品はHomeとその団らん、愛などがテーマと言える。その世界は現実と同時に霊の世界でもある。

And as the Cricket showed him all these things—he saw them plainly, though his eyes were fixed upon the fire—the Carrier’s heart grew light and happy, and he thanked his Household Gods with all his might, and cared no more for Gruff and Tackleton than you do.⁽¹⁰⁾

ここではもはやCricketは登場人物の重要なものとなっている。

これで「第一声」は終わる。この作品はクリスマス物にふさわしく、メルヘンの世界を描くのだ。

第二声に入って霊の世界はますますよく出てくる。Berthaの父親のCalebは魔法使いではないが、盲目の娘Berthaに対する愛は、あまりにも悲惨な現実を覆い隠すために、霊、魔法、驚異（wonder）の世界でやっと成り立つのである。それは次の描写に見られる。

Caleb was no sorcerer, but in the only magic art that still remains to us, the magic of devoted, deathless love, Nature had been the mistress of his study; and from her teaching all the wonder came.⁽¹¹⁾

Berthaが盲目であるというこの小説の設定は、上で見るように霊界へと入り込むことと深く結び付いている。Berthaはその美しい世界で何の汚れもなく遊ぶ。

そしてCricketも実はこのメルヘンの世界を作りあげる大きな要素である。CalebもまたCricketを飼っているのである。そしてメルヘンの世界がそれをめぐって展開する。

But he too had a Cricket on his Hearth; and listening sadly to its music when the motherless Blind Child was very young, that Spirit had inspired him with the thought that even her great deprivation might be almost changed into a blessing, and the girl made happy by these little means.⁽¹²⁾

そして次にVoicesやSpirits、Fireside、Hearthなど大文字の、霊の世界の住人が登場するのである。

彼等が毎日の仕事として「人形」を扱う設定となっているのも、同様に考えることができる。生身の人間でも小さなハンドル一つで、人形のように「カラク」られると述べられているが、こういう言い方には鋭い皮肉がある。それらが機械仕掛で動き回るのも、その盲目の娘が現実も忘れて夢に描く「おとぎの国」での生きた登場人物である。

第三声は第二声の最後で見た地獄絵からくる苦悩から始まる。チビのMrs. Peerybingleと謎の男との仲を疑ったJohnの苦悩である。Cricketのすみかの暖炉の前で一人彼は考える。ドア一枚向こうにはその男が居る。鉄砲は壁に掛かっている。それでひと思いに、．．．その時Cricketが鳴き始める。Cricketの精達が現れる⁽¹³⁾。彼等はチビの弁護をする。彼は思う。

‘Heaven bless her!’ said the Carrier, ‘for the cheerful constancy with which she tried to keep the knowledge of this from me! And Heaven help me, that, in my slow

mind, I have not found it out before! Poor child! Poor Dot! *I* not to find it out, who have seen her eyes fill with tears, when such a marriage as our own was spoken of! I, who have seen the secret trembling on her lips a hundred times, and never suspected it till last night! Poor girl! That I could not hope she would be fond of me! That I could ever believe she was!⁽¹⁴⁾

2行目のthe knowledgeは、上の引用のすぐ前に、彼は彼女と結婚しない方が良かったと言っている事を指す。Dickensは華やかなヴィクトリア朝の掃きだめに咲いた、小さな花を描く。スローな頭脳の自分に対する敬虔で謙譲な気持ち。これこそ「心の貧しい」神を恐れるヴィクトリア朝の庶民の姿である。

こんな中でBerthaやその父もやって来るが、

She(=blind Mary) heard the Cricket—voice more plainly soon, and was conscious, through her blindness, of the Presence hovering about her father. ⁽¹⁵⁾

Berthaはblindなるが故にthe Presence, 美しいCricketの聲が醸し出す霊の世界を受入れ易いのだ。Berthaはこの世界に初めから入る資格があるのだ。父親が今まで自分を悲しませまいために装っていたのが嘘であったことを教えられるが、彼女には今までの嘘が信じられない。いや逆に、世俗の曇った目には見えない純粋な精神を、愛する父親の中に彼女は見るのである。そしてこれこそがこの作品を支えているものであり、クリスマスものにふさわしい輝きを放つのである。そしてBarthaの開眼が起こる。

‘It is my sight restored. It is my sight!’ she cried. ‘I have been blind, and now my eyes are open. I never knew him! To think I might have died, and never truly seen the father who has been so loving to me!’

There were no words for Caleb’s emotion.⁽¹⁶⁾

「目明き盲目」ならず「盲目の目明き」とも言うべき悟りである。Berthaが父の心遣いに目覚めて真実を覚る場面である。すなわち心の目での悟りである。Berthaは、何も無くなってはいない、みんなお父さんの中にある、と次のようにいう。

‘...All are here in you. Nothing is dead to me. The soul of all that was most dear to me is here—here, with the worn face, and the gray head. And I am NOT blind, father, any longer!’⁽¹⁷⁾

今まで着ている服が奇麗だとか何とか言って、自分を飾り立てていてくれた父、それが暴露された時の言葉である。これこそエピファニーだ。悟りだ。

Edwardの耳が聞こえないということにも、Berthaの盲目と同様に特別の意味があるように思われる。TackletonとMayとの結婚式の日、自分の手中に確保したMayを手放すことを断わり、それに毒づくTackletonにEdwardは次のように言う。

‘I mean, that as I can make allowance for your being vexed,’ returned the other, with a smile, ‘I am as deaf to harsh discourse this morning, as I was to all discourse last night.’⁽¹⁸⁾

ここでは俗悪な事には「聞く耳をもたない」という意味がある。すなわち、Edwardはdeafを装っている。醜悪なるものには聞こえない「ふり」をするのである。

II

他にも善意の人々や生きものたちが沢山描かれている。Johnの荷馬車と世間の人々との結びつきと動物たちの生き生きした描写は、メルヘンの世界でなく現実の世界ではあるが、そのイノセントな在り様は正にメルヘンの世界のような健康さである。

物語の終りに近づき、Johnは妻が自分には言わずにEdwardのことで密かに策略を練っているのを知って無視されたと思い、自信をなくす。そしてMayとEdwardとの結婚の見通しが立った今、妻はJohnに今までのことを謝し、次のように言う。

‘No; keep there, please, John! When I laugh at you, as I sometimes do, John, and call you clumsy and a dear old goose, and names of that sort, it’s because I love you, John, so well, and take such pleasure in your ways, and wouldn’t see you altered in the least respect to have you made a King to-morrow.’⁽¹⁹⁾

これこそは、ヴィクトリア朝の庶民の「平凡」の意味なのだ。Berthaの父のCalebも含めて、この作品はこのような健康な庶民の善意を称揚する物語なのだ。Johnの妻は夫の不器用さを愛情をもって見守っている。これこそは人間のあるべき一つの姿だと、Dickensは言っているのである。

Dickensの中にみられるペーソスはこのようなねらいを背後に持っている。要するに、この作品は*Christmas Carol*と同じくクリスマス向きであり、日常の自分の生活をじっくりと考えなおしてみる物語であることが分かる。

上の「Johnの妻が夫の不器用さを愛情をもって見守っている」ことは、この作品ではこの世のあらゆる「善意の人々」にも同様に向けられる。

Oh Mother Nature, give thy children the true poetry of heart that hid itself in this poor Carrier's breast—he was but a Carrier by the way—and we can bear to have them talking prose, and leading lives of prose; and bear to bless thee for their company! ⁽²⁰⁾

Johnはこの直前“a dot and carry”とか言って洒落を言い損なう。そして作者はJohnに宿る人間性を拾い上げている。上ではそういう不器用さがtalking proseでありleading lives of proseと表現されている。そしてそれに対してJohnの中に宿る人間性・神性をthe true poetry of heartと言う。それを皆に与え給えと祈る。クリスマスにおける万人への祈りである。we can bear...は、DotがJohnの不器用さを暖かく見守る具体的な行動である。

子守り役のSlowboyは、その存在そのものがユーモアの源であり、この作品において重要な役割をしている。彼女が登場する時は必ず滑稽を伴う。

...while a couple of professional assistants, hastily called in from somewhere in the neighbourhood, as on a point of life or death, ran against each other in all the doorways and round all the corners, and everybody tumbled over Tilly Slowboy and the Baby, everywhere. ⁽²¹⁾

上はMayとEdwardの結婚が成功し、Mayを自分の妻にしようと企んでいたTackletonも了解して、そのお祝いの御馳走を作る時の様子である。Slowboyのそそっかしさや、the Babyが二人の御馳走作りの「専門の助手」の片割れにされてしまうという面白さがある。

III

善意の人々の描写は動物にいたってその極限に達する。Johnが赤ん坊をいつくしむ様は、猛犬のmastiff犬にたとえて次のように描かれる。

...such as an amiable mastiff might be supposed to show, if he found himself, one day, the father of a young canary. ⁽²²⁾

これは動物の擬人化である。猛犬の父親愛である。また飼い犬のBoxerの描写は絶品である。

He had gone with the cart to its journey's end, very much disgusted with the absence of his master, and stupendously rebellious to the Deputy. ...But suddenly yielding to the conviction that the Deputy was a humbug, and must be abandoned, he had got up again, turned tail, and come home. ⁽²³⁾

これが犬のことであるのはなかなか分かり難い。最後に皆でパーティーをするが、それに居合わせようとJohnは代理人と犬と馬に馬車を任せて来てしまうが、無責任な代理人のために仕事先の酒場で三者は置きっ放しにされるはめになる。犬は大いに不満で初めはその酒場の暖炉の前に上がり込んで寝そべっていたが、あと自分の独断で勝手に帰ってくるのである。犬が自分だけでその荷車を懸命に引っ張って帰ってきて、雇人が役立たずの馬鹿であることをみて取るや、独断で帰宅するといった行動が、いくら名犬であっても果たして犬という動物に可能だろうか。それをBoxerにさせているのは、先にも述べたようにこの作品が敬虔なクリスマスを彩る、通常の世界を越えた、Cricketが支配する霊の領域に属するものであるからだと思われる。これはkettleやCricketの擬人化と共に、一連のこの作品の特徴をつくり出している。これにもまして印象的なのがBerthaとBoxerとの共感である。あまりにも感動的なので、少し長いが引用する。

Boxer, by the way, made certain delicate distinctions of his own, in his communication with Bertha, which persuade me fully that he knew her to be blind. He never sought to attract her attention by looking at her, as he often did with other people, but touched her invariably. What experience he could ever have had of blind people or blind dogs, I don't know. He had never lived with a blind master; nor had Mr. Boxer the elder, nor Mrs. Boxer, nor any of his respectable family on either side, ever been visited with blindness, that I am aware of. He may have found it out for himself, perhaps, but he had got hold of it somehow; and therefore he had hold of Bertha too, by the skirt, and kept hold, until Mrs. Peerybingle and the Baby, and Miss Slowboy, and the basket, were all got safely within doors. ⁽²⁴⁾

この感動はBerthaが盲目であることによって倍増する。まるで現在の盲導犬であるかのように、BoxerはBerthaを庇護する。動物にはこのことを見抜く本能、人間がまだ及びもつかない本能があるのかもしれない。その美しさをDickensは示してくれている。ここには人間の能力の枠を越えた何ものかがある。

21世紀に一步足を踏み入れた今でこそ、環境問題とからんで動物への関心が強くなり、動物を人間と一体となったものとして考えるようになってきたけれども、19世紀のヴィクトリア時

代に、このように動物が描かれるということは驚くべきことである。ここにはイギリスが世界に雄飛したあのヴィクトリア時代に生きる、力強い生活が見られるのである。

IV

踊り、ダンスに始まる最後の幻の世界は圧巻である。ダンスがMayによって始まると同時に、現在形が支配する。ここからはもう読者は劇の観客として、目の前に舞台を見ている。人物たちが踊り狂う中で、Cricketは次のようにその役割りを終える。

Hark! how the Cricket joins the music with its Chirp, Chirp, Chirp; and how the kettle hums! ⁽²⁵⁾

そして著者の私があの爽やかなDotの姿をもう一瞥しようとした瞬間、すべてのものは消え去って後に残るのはただ次の描写のみである。

...I am left alone. A Cricket sings upon the Hearth; a broken child's-toy lies upon the ground; and nothing else remains. ⁽²⁶⁾

最後には壊れた玩具がころがっているだけで、他になににも残ってはいなかった、というこの最後は何を意味するのだろうか。ここで思いおこされるのが、日本の複式夢幻能の構成である。能の場合、もともと社とか由緒ある場所に諸国一見の或る僧侶が訪れて、そこに今はなきシテ役を見だし、後半でそのシテ役の生前の見せ場があり、ひとしきり舞った後何処ともなくそれは姿を消し、残るはただ……ということになる。この作品は炉端の一端の夢だったのだろうか。炉端とCricketが話の主題であって、他はお添え物だったのだろうか。また同時に壊れた玩具からくるペーススが狙いで、ヴィクトリア時代の悲哀が主題なのだろうか。いずれにしてもこの作品は、めでたしめでたしでは決して終わらない何かを持っている。

[注]

- (1) Cf. Angus Wilson. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker & Warburg, 1970. p. 181.
- (2) Charles Dickens. *Christmas Books*. Oxford: Oxford U.P., 1997. p.159.
- (3) *Ibid.*, p. 166.
- (4), (5) cf. *Ibid.*, p. 167.
- (6) *Ibid.*, p. 167.
- (7) *Ibid.*, p. 176.
- (8), (9) *Ibid.*, p. 180.
- (10) *Ibid.*, p. 181.

- (11) *Ibid.*, p. 182.
- (12) *Ibid.*, p. 183.
- (13) *Cf. Ibid.*, p. 210.
- (14) *Ibid.*, p. 217.
- (15) *Ibid.*, p. 222-3.
- (16) *Ibid.*, p. 223-4.
- (17) *Ibid.*, p. 224.
- (18) *Ibid.*, p. 229.
- (19) *Ibid.*, p. 228.
- (20) *Ibid.*, p. 164.
- (21) *Ibid.*, pp.230-31.
- (22) *Ibid.*, p. 164.
- (23) *Ibid.*, p. 233.
- (24) *Ibid.*, pp.195-6.
- (25), (26) *Ibid.*, p. 234.

〔付記〕

本論文は平成14年度教育職員研修の成果となる研修報告である。

(こが まさかず 英語英米文学科)

2003年10月15日受理